「グロテスク」：桐野夏生著　を読んで

徳島大学大学院先端技術科学教育部環境創生コース化学機能創生コース
田中　春樹

文章が綺麗すぎる、それが初めの印象でした。そういった綺麗な文章が結果的に、本作品をより強調するのでした。この物語は二人の姉妹が中心に書かれています。姉妹は、同じ両親から生まれたものとは思えないほど容姿が似ていないのでした。姉は、母親に似ていたのでしたが、妹は他の誰よりも美しい人形のような容姿をしておりいつも贔屓されており、異世界のモノであるかのように扱われていました。

女性は男性以上に容姿が重要であり、それが人生を左右することは決して珍しいことではありません。しかし、この本を読み進めていくにつれて、生まれながらにして最高の美貌を持つ人間であるが故の苦悩が見え隠れします。本人は美貌など、どうでもよくむしろ母に似ている姉の方が、血縁関係が見えてうらやましいと述べる部分があります。普通の感覚であれば、美人なのが得にはなっても悩みに繋がるはずがないと考えがちです。しかし、現実は血の繋がりが見えた方が当人にとっては良いのかもしれません。私自身、親の若い頃と顔が似ていることから、血の繋がりについてはそんなに気にしたことがありませんでしたが、本作品を読み、自分自身が恵まれているのだと初めてわかりました。

視点の置き所によって同じ世界に異世界を創造する。それは、当然の事でありながら、本の中ですら完全には捉えられないのです。本作品は、姉妹の手記を紹介するといった方法で物語が展開されていて、言葉遣いから細かな感情など非常に女性的でした。そのため理解できない感情の動きがあり、性別の違いを再認識させられました。そういった意味でも、少なからず影響を受けました。

高校時代に妹の売春行為の噂を耳にした担任の先生から、君の仕事は君を好きな人を根底から傷つけること、誰も君を愛さなくなるし君も愛せなくなると諭されたとき、自分の体は自分自身のものであり自分を愛するものは自分の体まで支配しなくては気がすまないのか、そうであれば自分は一生愛なんて知らなくていいという場面があります。つまり、彼女は本物の愛情に飢えていたのです。それを吐露するかのようなこの一面は非常に印象が強く、彼女自身の人生における分岐点であったように思えます。数年後、妹は、同じ高校出身で昼は有名企業のOL、夜は自分の体を売るといった暮らしをしている、かつての姉の友人に遭遇します。対照的な人生を歩んできながら、行きつく場所は同じ立ちんぼう。ただ男に愛されることを知らないだけなのに、堕ちて、一線を越えてしまったOLの彼女はまさに怪物でその姿はグロテスクなのでした。

自ら招いた現実を受け止められない彼女に、読んでいて、居た堪れない感情が湧きました。解釈一つで人生は違うものになるのに、どうして彼女は気づかないのか、そして、気づかせてくれる人がいない環境を作りだした彼女が不憫でなりませんでした。また、人生の主人公は良くも悪くもいつだって自分自身であることをこの本から、学べたと思います。